

あまり気づいていないかもしれませんが、都市部でも木造建築が少しずつ建ち始めています。これまで都市には、鉄筋コンクリート造や鉄骨造の高層建築が建ち並び、木造建築は大多数が木造密集市街地に建設された2階建て程度の戸建木造住宅でした。木造建築のうち大規模なものは、森林資源が豊かな地域で地産地消を合言葉に、庁舎や学校、体育館などの公共建築が中心に建築されてきました。「都市」と「木造」、ふたつの言葉の間にはこれまであまり接

建築を実現することは、それ自体が森林資源の有効活用を増大させるとともに、その背景にある国内の森林資源に興味を持つという点でも重要な役割を果たすこととなります。ここで、「都市」と「木造」の新しいつながり「都市木造」が注目されることとなります。

2020年に五輪が開催される東京では、競技場はもちろん、選手村、プレスセンターなどの関連施設が建てられることとなりますし、東京全体が変化していきます。この変化の中で、

コンクリート造や鉄骨造のビルに木を使うのもひとつの答えです。通行者の視線に近いエントランスホールや外装材への使用は、街の雰囲気大きく変えるでしょう。建物だけでなく、ベンチやバス停、自転車置き場といったストリートファニチャーは、手軽に木造にできる可能性もついています。運河沿いの、デッキや売店、船着き場はもともと木造で建てられていました。歩行者専用であれば木橋もあります。公共建築だけでなく、民間建築にも、都市の中に少しずつ

# 緑のエッセイ



●プロフィール  
昭和43年、千葉県生まれ。  
平成24年4月東京大学生産技術研究所教授として、伝統木造建築、木造住宅、近代木造、現代木造の可能性を構造的な視点から追求している。  
平成22年木でつくることをあきらめたもの、木でつくりたいと思っていたものが、木でつくれるとしたら、街はどのように変わるのでしょうか?を合言葉に都市における木造建築の可能性を追求するNPO法人team Timberize設立、同NPO理事長。  
「ティンバライズ建築展」を全国巡回中。

点がなかったかもしれません。

これは、これまで木造建築では耐火建築物が実現できなかったため、都市部の土地を有効に活用する3階建てを超える多層建築を木造で建築できなかったのです。しかし、2000年の性能規定化により木造建築でも耐火建築物が実現可能になりました。そこで、「地産地消」から「地産都消(地方生産都市消費)」という考え方が生まれました。建築需要の大きい都市部で木造

どのように木を使っていくことができるでしょうか。五輪の関連施設だけでなく、競技を見に行くときに通る街、競技終了後に余韻にひたる街、単体の建物だけでなく街の風景のなかに、どのように木を使うか街をどのように変えられるかが都市木造には重要な考え方です。

中高層など大規模な木造建築は、新しい木造建築の象徴としてひとつの答えですし、低層で平面的に広い建築は、これまでの木造建築のイメージを継承する答えです。あるいは、鉄筋コ

つでも木を使うことで新しい風景が生まれるとともに木に触れる機会が増えることを期待しています。

